

観光文学研究とエコクリティシズム

Tourism Literature and Ecocriticism

舛谷 鋭*

MASUTANI, Satoshi

Abstract: Tourism studies traditionally developed from industrial studies, and in particular the social sciences. However, at present the human sciences, particularly geography and anthropology, have greater influence on this field. To date, however, literary studies have not been an important part of tourism studies, despite it being an important influence. We see several examples of this in French and English literature. Literary theory has also impacted studies on tourism in the area of liberal humanities. Since the turn of this century ecocriticism has emerged as one of the more influential ideas in Ecotourism and tourism studies. This study considers ecocritical tourism employing Malaysian Sinophome examples for analysis.

Key words: 観光文学研究 (tourism literature), トラベルライティング (travel writings), ネイチャーライティング (nature writings), エコクリティシズム (ecocriticism)

- I 研究の背景
- II 外国文学研究の中の観光文学研究
- III トラベルライティングとしてのネイチャーライティング
- IV 文学理論とエコクリティシズム
- V トラベルライティングのエコクリティシズム事例
- VI おわりに

I 研究の背景

観光研究は、産業論から出発し、経営学、経済学、計画学などの社会科学の視点と方法論から、観光に関する諸問題を扱ってきたが、観光地理学、観光人類学など、すでに人文科学の視点と方法論の重要性は言うまでもない。2010年代の観光概論教科書である『観光学ガイドブック』にお

いても、第II部、観光学の諸領域として、人類学、地理学、民俗学、歴史学などの文化科学が列挙され、同じく『観光学キーワード』にも第7章、資源化される文化でツーリストアートやアニメツーリズムが項目に挙がっている他、第5章、さまざまな観光実践として、ポストコロナルツーリズムが紹介されている。

20世紀後半以降、哲学の玉座を代置した文学理論、すなわちリベラル人文科学の観光教育、観光研究へのかかわりは別稿にまとめた¹⁾が、2000年代以降加わった新理論であるエコクリティシズムによる観光研究については前稿の補足として追加したい。これら文学理論や文学研究が観光研究に与えた影響について、たとえば観光社会学者ジョン・アーリ(1946-2016)の「観光のまなざし」が、フーコーの影響下で構築主義、そしてワーズワースらの実作によって明瞭になったロマ

*立教大学観光学部・教授

ン主義を絡めて著述されていることから、全くないとは言い難いが、積極的に「観光文学研究」を謳う例は、前述の教科書類にも見つからない。

すでに観光学の研究対象である広義の「トラベルライティング」²⁾や文学散歩、物語の旅の現代的な展開であるアニメ聖地巡礼などのコンテンツツーリズムは、まだまだ事例研究に留まるものが少なくないが、研究の深化と理論化の必要性は、新たな観光研究テーマの中でもダークツーリズムなどと同様、広く認識されつつある。

このように、単なる消費を超えた言語文化としての文学と観光は、表現芸術であるアート以上に観光および観光研究と関わりの深いものと言える。

II 外国文学研究の中の観光文学研究

ミシェル・ビュートル (1926–2016) は戦後フランスを代表する作家の一人であり本国で1万ページを超える全集を持つが、未訳作品も少なくない。幸いにして清水徹らによって邦訳されている「旅とエキリチュール」に観光と文学の関わりを見事につかみ出した一節がある³⁾。

旅をすること、すくなくともある種のやり方で旅をすること、それがそのまま、私にとって書くことであり(いや、それよりもまず、読むことであり)、そしてまた、書くことがすなわち旅をすることであるからこそ、私は旅をすることです。

こうした旅と著述について、ビュートルはたとえば、自分を含め二次大戦後フランス文壇のアメリカ詣を、19世紀ロマン主義作家のエキゾティシズムに彩られたオリエンタ旅行と同じく通過儀礼と看過したが、ロマン主義的「トラベラー」は内なる「ツーリスト」であるという矛盾を自覚し、露呈させ、嗤ってさえた。

石橋によれば、集団制作としての観光地とそこに参加する読者としてのツーリスト(トラベラーでなく)という構図になるビュートル的「観光文学」は、逆転(脱構築)、確率論的人物(の循環)、

形式性(モノ/ヒトの互換)という3つのキーワードにまとめられるという⁴⁾。こうした文学者による旅と表現あるいは脱構築がなかったなら、われわれの過去から現在、そして未来に渡る旅はどれほど貧しいものになっただろう。

フランスばかりでなく、日本の観光文学研究でも仏文優位は揺るぎそうもない。中でも19世紀詩人ロートレアモン研究者の石井は『美の思索—生きられた時空への旅』、『異郷の誘惑—旅するフランス作家たち』、『パリ—都市の記憶を探る』など、パリを始めフランス各地の場所の特性をつかみ出し、「パリは通過されるべきでない」などの警句が、本学の観光地理学講義などでキーワードとなっている。他にもバルト翻訳者のうちの一人である石川は、日欧問わず旅文学を取り上げ、風景、時間、エキゾティシズムなどの視点で一冊にまとめ⁵⁾、映画、文芸評論家としても知られる野崎はネルヴァルの『東方紀行』を論じ⁶⁾、広くヨーロッパ文学を専攻する斎藤はモンテーニュの旅を総合的に記述している⁷⁾。書籍にまともではないものの、ヨーロッパ作家のオリエンタ旅行について、畑の諸論文も観光文学研究に寄与するだろう。

対する英語圏では、木下の旅と大英帝国⁸⁾、中島のイギリスの風景⁹⁾などが英文学者によって著されている。アメリカ文学を扱ったものとして、亀井らは荒野の開拓からナイアガラ等観光資源の発見まで、広く目配りしている¹⁰⁾。

これらの研究は単に外国文学の中の旅行記や紀行文の紹介を超え、それぞれの時代でどのような旅がなされ、変容し、現在に受け継がれているかを教えてくれていることは、ビュートルの前言を待つまでもない。

III トラベルライティングとしてのネイチャーライティング

狭義のトラベルライティングは主にトラベルライターが執筆する旅エッセイを指し、トラベルライターは旅の体験を表現する人々である。日本旅行作家協会の正会員は300名を数えるが、多くは旅行雑誌やガイドブックへの執筆で、原稿買取

り、印税契約なしの正に「ライター」であることが少なくない。言い換えれば、執筆依頼はなく、「旅」から文を著し印税契約を結ぶ「作家」とも言えよう。

このように、トラベルライティングおよびトラベルライターは、日本の出版業界では作家固有性が低いイメージで尊称たりえないが、欧米圏の書店やアジアの洋書店では必ず「Travel Writing」コーナーがあり、一定の作家固有性が担保されている。そうした見方をすると、観光学の研究対象としての旅行記、紀行文とガイドブックなどを総称し、ローマ字からカタカナ変換した広義の「トラベルライティング」と捉えることができよう。

一方、自然観光によって生成されるネイチャーライティングは、トラベルライティングの有力な一分野でありながら、昨今の文学研究の場においてはそれを超越するものと言える。たとえば、文学・環境学会（ASLE-Japan）初代会長で、一時期本学部に籍を置いた野田は、人間世界の出来事と自然現象のあいだのつながりや関係を「交感」と呼び、そうした状態こそがネイチャーライティングのテーマだとする。自然を、単に人間を取り巻く「環境」のみならず、「風景」として捉えることが観光における感動を生むという¹¹⁾。ネイチャーライティングを「自然について語るエッセイあるいは旅文学」とすれば、トラベルライティングとの重なりは明らかであろう。

IV 文学理論とエコクリティシズム

すでに文学理論と観光学の関係について、アーリの例を挙げたが、20世紀後半に一通りの問題群が出尽くしたかに見えたのち、21世紀初頭以降、文学・批評理論一覧に新たな項目として現れたのがエコクリティシズムである。たとえば観光教育においても良書の一つであるカラーの『1冊でわかる文学理論』は初版（1997）を翻訳底本としているが、原著新版（2000）ではエコクリティシズムを新たな章として加えている。また、イーグルトンに代わる新たなスタンダードとされる、バリー『文学理論講義』（1995）も第二版（2002）から、文学の「グリーンな」アプローチへの関心

の高まりを反映し、「エコ批評」として、エコクリティシズムに一章を割いている。これらのエコクリティシズムは自然の「風景」だけでなく、動物や異界など、あらゆる自然の見方を対象としており、単純に環境の問題を文学、文化事象から分析する批評分野とも言い切れない。観光人類学からはすでにエコツーリズム批判が行われている¹²⁾が、エコクリティシズム理論によって、多くの現代人が自然とのかかわり方としての観光を深化、再考することができる。この理論によるポストロマン主義の自然観については別稿に譲るが、以下ではマレーシアの華人作家の事例を紹介する。

V トラベルライティングのエコクリティシズム事例

マレーシアはマレー人、華人、インド系を主とする多文化社会だが、民族ごとに言語、宗教、生活圏などが縦割りであり、人口比で勝るマレー人と他の民族との関わりは文学や映画の題材として取り上げられ、たとえばマレー半島西海岸に集住する華人の東海岸やサバ、サラワクへの旅はエスニックツーリズムの様相を呈する。

華人写真家卓衍豪（CHOK YEN HAU）のトラベルライティングはMYROADPLANNER.COMで主にネット発信されているが、華語¹³⁾とともに英語でも¹⁴⁾『マレーシア発見』シリーズが出版されている。マレー語による発信はないものの、卓はシリーズの中で、これまで見たことのマレーシアの美しさを、民族や国内外を問わないプラットフォームとして、共有することを提唱している。こうした試みは民族縦割りへの意義申し立ての一種とも捉えられるが、華人作家の中には、国内で「敏感問題」としてタブー視される民族問題を題材化している例もある。

マレーシアから日本、ドイツ、そしてアメリカへと流浪するマレーシア華人作家シルビア・シエン（禰素萊、1966-）について、筆者は日本、ドイツを巡るダークツーリズムによる歴史認識のゆらぎを描いた作品を邦訳しているが¹⁵⁾、彼女のネイチャーライティング「秘密の花園」（2010）は別稿¹⁶⁾で全文を紹介している。「親愛なるデニス」

(1989)¹⁷⁾でマレー人(=ムスリム)と自分たち華人との文化摩擦と日常におけるささやかな和解を描くことから始まった作家の道程は、日本、ドイツでの留学生活を経て華人としての認識を強めたかに見えたが、NATO 平和維持部隊の従軍通訳を経験し、渡米後はノーベル平和賞を受賞した劉暁波が元会長だった独立中国語ペンクラブからアメリカペンクラブへ鞍替えしたことは、「秘密の花園」に描かれた東マレーシアへの旅の一つの契機としている。(以下翻訳は著者による)

私とフランソワズはわざわざ河沿いのプナン族の「檻」に立ち寄った。彼らは元々森の中で暮らしていたが、今では追い立てられて落ち着かない境遇だ。特別に設えた草棚の下で鼻笛を見せたり、ゴザを編んだり、それにお尻丸出しの子供が観光客のチップ目当てに集まって来る。元は大自然を家としたプナン族だが、今では政府が用意したロングハウスに住むよう強制されている。森での数千年に渡る放浪の記憶も今では伝説となり、消えかかっている。ロングハウスの後ろの森を見て、フランソワズは「文明の破壊だわ」とため息をついた。

長期滞在中のヨーロッパ発のシエンの「海外旅行」は、母国を客観視するきっかけとなり、マレーシアの非主流民族が華人だけでなく先住民を含むことに気づき、自分をプナン族を支援し行方不明になったスイス人活動家ブルーノ・マンサーの側に置く。

環境保護についての研究報告を読んだことがある。そこで私はマレーシアの原生林に地球で最後の森の狩猟民が住むことを知った。プナン族はその内の一つである。もっと前に、私はブルーノ・マンサーというスイス人が、プナン族が森林伐採勢力と対抗するのを助けていると聞いた。プナン族の森の楽園を素手で守ろうとし、彼らの言語や文化、習俗を学ぶ努力をしたと言う。もちろん、現地政府は吐き捨てるように「白い毛唐が我が国の成長

発展を邪魔するのは、我々が彼らに追いつき追い越すのが忌々しいからで、森林保護を口実に、先住民に生活を変えないよう、いつまでも遅れた生活を続け、森に住み続けさせ、いつでも観光できるようにしたいのだ。」と言っていた。

シエンは近著の従軍通訳エッセイ¹⁸⁾で、マレーシアは母国(Motherland)、ドイツは父親(Vaterland)、伴に中国語の「家園」に当たり、マレー語で言えば「Tanahair」で、「父有り、母有り、私の心の中で二つのアイデンティティに矛盾はない」と述べている。そして移民国家アメリカでの生活を、「いまは定住の場所はなく、心の中に故郷があるだけ」とも表現する。そして、

(母国マレーシアから)ヨーロッパに帰り、城の河辺の草むらに座り、私とフランソワズは友人たちに、(プナン族の)ムータンにももらった薬草ですっかりよくなった皮膚のことを話していた。フランソワズはため息をつきながら言った。「本当に忘れ難い場所だった。でも過去四十五年の間に森林伐採で九割方破壊されているなんて。千万年の歴史を持つ原生林なのに。みんな知ってるのかしら、自然の価値はどの工業文明よりずっと尊いの。」彼女は熱帯雨林保護運動に加わるという。私は言った。「でも向こう岸の人から見ると、こちら側の草むらは永遠に自分たちより青く見えるのよ。」

とこの作品を締めくくっている。前述のペンクラブ移籍は、国内民族問題から国際環境問題への関心の推移による変心を端的に示している。地球環境へのアプローチとしての自然ツーリズムに、エコツーリズム、アドベンチャーツーリズム、農村観光などの観光形態を含めたとき、シエンの作品には自然ツーリズム経験による発現としてのトラベルライティング、ことにネイチャーライティングと言えらるだろう。

IV おわりに

本稿ではマレーシア作家のネイチャーライティングの事例によって、文学研究による観光学の読み直しを試みたが、それはエコクリティシズムに止まらない。コンテンツツーリズム研究では、多くの場合、事例紹介の域を出ないが、石橋の「コンテンツツーリズムの原点としてのシャーロック・ホームズ」は、ホームズ「最後の事件」の舞台ライセンバッハの滝への聖地巡礼から、ドイルが著者を凌駕した作中人物を、自分が生きるために殺さざるを得なかった物語と観光の一致を感じ得るといふ、コンテンツツーリズムの原点が理論化され、他の研究とは一線を画し、公刊が待たれる論稿である。また、外国文学研究(外文)による読み直しは、羽生の諸作を除き、まだ多くないように思われる。

こうした外文、トラベルライティング研究にエコクリティシズムを含む文学理論を加え、観光文学研究としての領域創造に向け、今後の蓄積を期したい。

注

- 1) 舛谷鋭(2014) 観光教育と文学研究—交流文化学科での実践から—立教大学観光学部紀要, 16, pp. 124-131
- 2) 本稿では広義の「トラベルライティング」を、旅行記や紀行文など、観光学の研究対象を幅広く包含し、エコツーリズムやグリーンツーリズムなどの自然観光そのものだけでなく、多くの人々の自然との関わり方である観光によって生成されるネイチャーライティングをも含む概念とする。
- 3) ビュートル, (1983): 中心と不在のあいだ—都市と世界と, 朝日出版社(清水徹ら訳)
- 4) 石橋正孝(2015): ミシェル・ビュートルと観光文学の可能性, 立教大学観光学部紀要, 17, pp. 27-44
- 5) 石川美子(2000): 旅のエクリチュール, 白水社
- 6) 野崎欽(2010): 異邦の香り—ネルヴァル『東方紀行』論, 講談社
- 7) 斎藤広信(2012): 旅するモンテニユー—16世紀ヨーロッパ紀行, 法政大学出版会
- 8) 木下卓(2011): 旅と大英帝国の文化, ミネルヴァ書房
- 9) 中島俊郎(2007): イギリス的風景—教養の旅から感性の旅へ, NTT出版
- 10) 亀井俊介編著(2009) アメリカの旅の文学—ワンダーの世界を歩く, 昭和堂

- 11) 野田研一(2003): 交感と表象—ネイチャーライティングとは何か—, 松柏社
- 12) 須永和博(2012): エコツーリズムの民族誌, 春風社
- 13) 卓衍豪(2013) 発現大馬, My Road Planner, Kuala Lumpur, (2014) 発現大馬2, My Road Planner, Kuala Lumpur
- 14) Chok, Yen Hau(2014) DISCOVERY MALAYSIA, My Road Planner, Kuala Lumpur
- 15) シルビア・シエン「私の代わりにあやまっておいてください」『東南アジア文学』14 2016.3 (pp. 48-55)
- 16) 舛谷鋭(2011): 環境文学と観光のまなざし: ホルネオの「秘密の花園」, 環境という視座: 日本文学とエコクリティシズム, pp. 76-87
- 17) 舛谷ら(2001)『東南アジア文学への招待』段々社
- 18) 瀬素菜(2011)『随軍翻訳』有人出版, クアラルンプール

文 献

- 石井洋二郎(1997): パリ—都市の記憶を探る, 筑摩書房
石井洋二郎(2004): 美の思索—生きられた時空への旅, 新書館
石井洋二郎(2009): 異郷の誘惑—旅するフランス作家たち, 東京大学出版会
石橋正孝(2016): 武田百合子における旅とエクリチュール, 立教大学観光学部紀要, 18, pp. 99-113
石橋正孝(2016): コンテンツツーリズムの原点としてのシャーロック・ホームズ, 観光文学研究会配布資料
大橋昭一ら編(2014): 観光学ガイドブック—新しい知的領野への旅立ち—, ナカニシヤ出版
小谷一明ら(2014): 文学から環境を考える—エコクリティシズムガイドブック, 勉誠出版
カラー(2003): 一冊でわかる文学理論, 岩波書店(富山太佳夫ら訳)
卓衍豪(2016) 自遊馬来西亞, 大邑文化(新北)
野田研一(2007): 自然を感じるこころ—ネイチャーライティング入門, 筑摩書房
野田研一(2016): 失われるのは、ほくらのほうだ—自然・沈黙・他者, 水声社
畑浩一郎(2015): 旅行記, 自伝, 歴史, 聖心女子大論叢 124, 138-115
畑浩一郎(2012): 異国への郷愁, 聖心女子大学論叢 120, 58-41
畑浩一郎(2009): 自分を語る旅行者—シャトーブリアン『パリからエルサレムへの旅程』, 仏語仏文学研究, 39, pp. 25-44
畑浩一郎(2003): 都市と旅行者—十九世紀前半のオリエント旅行記をめぐって, 仏語仏文学研究, 28, pp. 51-75
畑浩一郎(2003): 旅行者と服装—19世紀前半のオリエント旅行記に見るアイデンティティの問題に関する一考察, 仏語仏文学研究, 27, pp. 107-132

羽生敦子 (2014) : 19 世紀フランスロマン主義作家の旅行記に見られる旅の主体の変遷, 立教大学観光学研究科博士論文

羽生敦子 (2016) : 19 世紀のナイアガラの旅, 観光文学研究会配布資料

バリー (2014) : 文学理論講義—新しいスタンダード, ミ

ネルヴァ書房 (高橋和久訳)

田口亜紀 (2014) : 旅行者か観光客か, 共立女子大学文芸学部紀要第 60 集

増淵敏之 (2014) : 物語を旅するひとびと—コンテンツツーリズムとしての文学巡り, 彩流社

山下晋司 (2011) : 観光学キーワード, 有斐閣

